「イタリア古典歌曲」研究序論

A Preliminary Study on *Arie Antiche*

中　巻　寛　子
NAKAMAKI Hiroko

What we call *arie antiche* is a group of well-known songs, consisting of nineteenth-century arrangements of Italian songs and airs that were originally composed in the preceding two centuries. It has been an important vocal repertoire for Japanese musicians : singers have performed songs from this group in their concerts, instructors have made good use of them as teaching materials, and every music college has utilized them as set pieces for entrance exams. Despite its importance, however, many problems concerning the *arie antiche* such as misattributions, dubious authorship and uncertainty of the sources have been raised by scholars over the years. Unfortunately such information is hardly known to Japanese performers. The purpose of this paper is to call their attention to these problems by bringing together all currently available information, and also to suggest the necessity of further study on each of the songs and the *arie antiche* as a whole.

はじめに

わが国で、いわゆる「イタリア古典歌曲」として知られている一連の声楽作品は、17～18世紀に作曲された種々の声楽曲を、主として19世紀の音楽家たちが、ピアノ伴奏による歌曲に編曲したものである。19世紀のヨーロッパでは、過去の音楽に対する関心の高まりとともに、この種の作品を収めた曲集が盛んに出版された。その中には、A. パリゾッティ Alessandro Parisotti（1835～1913）編纂による『古典アリア集 Arie antiche』（3 vols. Milano, 1885-1900）にように、今なお版を重ね、世界中の演奏家たちのレパートリー中に不動の地位を占めているものもある。

また、「イタリア古典歌曲」は、わが国では単に演奏用のレパートリーとしてのみならず、声楽の初心者用教材としても広く利用されて来た。その普及率の高さは、およそ声楽を志す者でこれを学ばぬ者はいないとさえ言われるほどであり、現在、本学を含めた多数の大学が、音楽または教育系の学部、学科での入学試験に際して、この「イタリア古典歌曲」を声楽の課題曲として出題しているのも、

まさに、そうした日本の声楽教育の実情を反映してのことなのである。

このように、わが国の演奏や教育の現場で長年に渡って重用されて来た「イタリア古典歌曲」ではあるが、成立から一世紀以上もの時が経過する間には、個々の曲について、作曲者の間違い、偽作の可能性等、様々な問題が指摘されている。しかし、残念ながら、そうした情報は一部の研究者の間では知られていても、「イタリア古典歌曲」を実際に利用している者の間ではほとんど普及しておらず、各大学においても、かつての誤った作曲者名を冠したまま課題曲を出題している例が、しばしば見受けられる。そこで、本稿では、種々の先行研究で指摘された「イタリア古典歌曲」に関する問題点を集めて提示し、日本の声楽関係者にそれらに対する注意を喚起するとともに、このジャンル全般に関するさらなる研究の必要性を明らかにして行く。

1.「イタリア古典歌曲」研究の歴史と現状

個々の作品について指摘されている問題点を挙げる前に、まずは、これまでの「イタリア古典歌曲」研究の状況を述べ、近年明らかにされた、このジャンル全体に関する問題を示すことにする。

そもそも、「イタリア古典歌曲」は編曲による二次的な創造作品であったために、作曲家とそのオリジナル作品の研究を中心としたかつての音楽学の世界では、これが研究対象となることはほとんどなかった。例外はいくつかの特に有名な曲に関する研究で、そのほとんどが作曲者とされていた人物に対する疑問を提起したものであった。また、作曲者に関する疑問は、20世紀半ば以降急速に進んだ、個々の作曲家の作品に関する資料研究の中からも浮上した。そうした事例が積み重なった結果、1980年代までには、「イタリア古典歌曲」として知られているもののうち、少なからぬ数の曲について、作曲者が完全に間違っていたことが判明したり、それまで作曲者とされていた人物に対する疑念が表明されたりすることとなったのである。そうした、個別の曲に関する研究の成果を総括した観があるのが、ジョン・グレン・ペイトンが1990年代に相次いで出版した歌曲集である（Paton 1991; Paton 1994)。

ペイトンは、あまりにロマン的に編曲された従来の「イタリア古典歌曲」への批判から、独自に古典歌曲の一次資料を研究し、それらに基づいた新たな編曲による歌曲集を出版した。こうした、一次資料により忠実な歌曲集の出版は決して初めてのことではなかったが、ペイトン版の特徴は、収録された各曲に対して、自他の研究の成果に基づく半ば学術的な解説が付されているという点にある。その解説には、ペイトン自身が編曲を行った際の原典となった楽譜に関する情報が明示され、かつての諸版に見られる作曲者の間違い等も訂正されている。ただ、残念なことには、この資料の本質は飽くまでも楽譜にあり、解説に当てられたスペースの狭さゆえに、貴重な情報もその出所や根拠が詳細に説明されている訳ではない。また、明らかにペイトン独自の研究に基づくと判る情報の中には、他者の批判を経ぬままにここに取り入れられているものもある。従って、そうした情報については、その内容の妥当性が未だ一般的には認められていないことに留意しなければならない。さらに、ペイトンは、この解説部分の情報を増刷のたびに最新版と取り替えているようで、一見すると同一の資料のようなのだが、選んだ本によっては情報が異なるという場合があるというのも、これを新たな研究のた

めの基礎資料として扱おうとする際の難点である。

一方、1990年代末には、全く新たな視点からこの「イタリア古典歌曲」の学術的な研究に取り組む者が現れた。マーガレット・ムラタがそれであり、彼女が発表した二つの論文は、「イタリア古典歌曲」が成立した当時の、ヨーロッパ音楽界における古楽ブーム全般を扱おうとする意欲的なもので、その中では、「イタリア古典歌曲」が編曲された際に、直接の原典となった楽譜に光を当てている(Murata 1998; Murata 1999)。これまでは、そうした中間資料の存在が知られていなかったために、「イタリア古典歌曲」はそれぞれの編曲者によって、作曲家に由来する一次資料から直接に編曲が行われたという、短絡的な思い込みが広まっていたと思われる節がある。しかし、ムラタによれば、パリゾッティ版に収録された曲の中には、彼の曲集に先立って出版された同種の楽譜に多少手を加えて、そのまま取り込んでしまったものが少なからずあるという。そして、彼女はパリゾッティ版の直接の原典として、以下のような曲集の名を挙げている(Murata 1998, 254-261)。

Capolavori de' classici napoletani: strenna agli associati della Gasetta musicale (anno primo): sei arie inedite del Alessandro Scarlatti, (Napoli: Stabilimento Musicale Partenopeo, n.d.).

Les gloires de L'Italie, chefs-d'oeuvre de la musique vocal italienne aux XVIIe et XVIII siècles: collection de morceaux de théatre, de concert et de chambre, ed. by François-Auguste Gevaert, 2 vols. (Paris: [Heugel], 1868).

Cäcilia. Geistliche und weltliche Arien und Lieder älterer Meister für eine Singstimme mit Begleitung des Pianoforte, bearbeitet und übersetzt von Prof. A. Schimon, Ferd. Gumbert u. A., (Offenbach am Main :Joh. André, [1875]).

Arien und Gesänge älterer Tonmeister … ausgewählt und herausgegeben von Carl Banck, (Leipzig: Fr. Kistner, n.d.).

明らかに、パリゾッティが参照した19世紀の楽譜はこれがすべてではない。今後さらに研究が進めば、ここに加えられる資料はいっそう増えることになるだろう。しかも、ムラタはそのパリゾッティ版の原典となった楽譜も、それ自体がまた、先行して出版された他者による編曲版を原典としている場合があり、結果として、そこには、二重、三重に編曲された末にできあがったものが多々あったことを指摘している(Murata 1998, 258 n.22)。そうした場合には、おそらくパリゾッティ自身さえもが、原曲がどのような曲であったのかも知らぬままに編曲を行うことになっていたであろう。

以上、述べてきた事から判るように、「イタリア古典歌曲」に関する研究は、ようやく、その本格的な始動に向けての端緒が開かれたばかりの段階にある。我々の知る「イタリア古典歌曲」は、各曲がその作曲者に由来する一次資料から、どれだけの数の中間資料を、それも、そこに記された音楽的

なテクストや、種々の情報に関する信頼性のあいまいな資料を介したうえで、現在の形に至ったのかさえもが未だに判っていない。しかも、中には、編曲の際の直接の原典はおろか、そもそもの出典さえ判らないという曲も少なからず存在している。そうした曲の場合は、それが本当に出版譜で指名されている作曲者の作品であるのかどうかさえも確認できていないというのが、このジャンルに関する研究の偽らざる現状なのである。

2．個々の曲に関して指摘された問題

それでは、改めて「イタリア古典歌曲」各曲について、これまでに指摘されている問題を４種類に大別し、それぞれに該当する曲を列挙して行くことにしよう。但し、紙面に限りのあることなので、ここで取り上げる作品は、わが国で現在最も普及していると思われる、畑中良輔編『イタリア歌曲集』（東京：全音楽譜出版）第１巻、および、第２巻に収録されているものに限定することにした。よって、各曲の題名は原題も邦題もこれに従うこととする。また、わが国のイタリア古典歌曲集については、パリゾッティ版の収録曲を中心に編集されているものが多いため、実際にはパリゾッティ版に収録されていない曲までが、そうであるかのように誤解されている場合があるようだ。そこで、以下の例では、パリゾッティ版に収録されていない曲については題名の前に＊印を添えて、パリゾッティ版に収録されているものと区別することにする。

1）作曲者が訂正された作品

《お前は私を苦しめていなかったのに　Tu mancavi a tormentarmi》

従来、この曲はチェスティ Antonio Cesti（1623～1669）の作品として知られて来たが、作曲者の名前や通称を記した同時代の手稿譜の発見によって、カールロ・カプローリ Carlo Caproli（1615-20～1692-5）の作品であると判明した。その結果、現在では、主要な音楽事典でもすでに同人の項目で作品表中に加えられている（MGG 1994-, Personenteil 4: 152; New Grove 2001, 5: 104)。

チェスティを作曲者とする誤った情報は、ベルギーの音楽学者、ヘファール François-Auguste Gevaert（1828～1908）が編集した曲集、『イタリアの栄光 Les gloires de l' Italie』に由来するもので、その誤りがこの曲集の楽譜を原典としたパリゾッティ版にそのまま受け継がれ、現在に至っている。ヘファールは大英図書館に所蔵されている Harley 1501 という所蔵番号を持つ手稿譜集の中にある楽譜を原典として、自らの版を編曲したものと推測されている（Murata 1998, 259 n.24)。しかし、実際に大英図書館でこの手稿譜を閲覧してみると、この曲自体には作曲者の名は記されておらず、その直前に収録されているの曲にチェスティの名が付されている。従って、ヘファールが Harley 1501 を原典としたというのが事実だったとすれば、彼はチェスティの曲が２曲続いていると誤認したものと考えられる。

《姿を隠さないでほしい　Deh, più a me non v' ascondete》

ジョヴァンニ・マリーア・ボノンチーニ Giovanni Maria Bononcini（1642～1678）作として知られ

ているが、実は、彼の息子のジョヴァンニ・ボノンチーニ Giovanni Bononcini（1670～1747）の作品で、元来はローマで1692年に初演された彼のオペラ、《エラクレーア、あるいは、サビーニ族の女たちの略奪 Eraclea, ovvero il ratto delle Sabbine》の中のアリアであることが、複数の手稿譜と台本によって確認された（Paton 1994, 68）。

パリゾッティは、この曲をローマのサンタ・チェチーリア音楽院付属図書館に所蔵されている、18世紀の手稿譜から編曲した。しかし、実のところ、その楽譜にも作曲者としてはジョヴァンニ・ボノンチーニの名が記されており、パリゾッティが何ゆえ、それをジョヴァンニの父親であるジョヴァンニ・マリーアのものとしたのかは全く不明。

《私はよく場所を変える　Vado ben spesso cangiando loco》

サルヴァトーレ・ローザ Salvatore Rosa（1615～1673）作と伝えられて来たが、作曲者の名を記した複数の手稿譜の発見により、上記と同じく、ジョヴァンニ・ボノンチーニの作品であることが判明した。この曲についても、主要な音楽事典では、すでにボノンチーニの作品表に加えられている（MGG 1994-, Personenteil 3: 363; New Grove 2001, 3: 876）

そもそも、この曲がローザの作であると誤認される原因を作ったのは、イギリスの音楽学者、チャールズ・バーニー Charles Burney（1726～1814）であった。1770年、バーニーは資料収集のためにイタリアを旅行し、その際にローマでローザの子孫という人物から一冊の楽譜帳を入手した。そして、その中にあったこの曲をローザの作として、後に執筆した『音楽史 A General History of Music』（4 vols. London, 1776～1789）の中で、譜例付きで紹介したのである。但し、バーニーが譜例として挙げていたのは、ダ・カーポ形式のアリアのA部分だけであった。従って、この曲が現在知られている形になるには、B部分を何らかの原典から補完した人物がいたということになる。ちなみに、この曲は19世紀中にイギリスで何度も出版されており、パリゾッティ版の直接の原典もそのうちのひとつであるという（Walker 1949a; Murata 1999）。

《私が賛える美しい神よ　Bel nume che adoro》

かつては、チマローザ Domenico Cimarosa（1749～1801）のオペラ《ピグマリオーネ Pigmalione》からのアリアとされていたが、ローマのサンタ・チェチーリア音楽院の図書館に所蔵されていた総譜によって、ジャンバッティスタ・チマドール Giambattista Cimador（1761～1805）のオペラ《ピンマリオーネ Pimmalione》の中のアリアであることが明らかにされた。そもそも、チマローザの作品中には《ピグマリオーネ》というオペラは存在しない（Barblan 1973）。

この曲をチマローザ作として自らの曲集に収録したパリゾッティは、サンタ・チェチーリア音楽院ゆかりの人物であった。それゆえ、この作品の真の作者を突き止めたバルブランは、パリゾッティが音楽院所蔵の総譜の存在を知っていながら、曲に付加価値を加えるために、敢えてより有名なチマローザの作として発表したのではないかという疑惑をほのめかしている（Barblan 1973, 199）。しかしながら、これは誤解である。パリゾッティ版の楽譜は、明らかに同時代の他者の編曲版を原典としてお

り、そこにはすでにチマローザの名が記されていたのである。[1]

2）真の作曲者が未だに判らない作品

＊《ニーナ　Nina》

この曲は、一般的にはペルゴレージ Giovanni Battista Pergolesi（1710～1736）の作として知られているが、これに対しては、ヴィンチェンツォ・チャンピ Vincenzo Ciampi（1719?～1762）が真の作者ではないかという異論がある。

ペルゴレージをこの曲の作者とする説は、ただ単に、19世紀後半に出版された数多くの楽譜にそう記されていたということが根拠となっている。しかしながら、哀切な《スターバト・マーテル Stabat Mater》（1736）を残し、わずか26才で夭折したペルゴレージは、その死後の名声ゆえに、偽作の多いことでも有名な作曲家である。そのことを思うと、それだけの根拠で、この曲を彼の作であると断定することができないのは確かである。

一方、チャンピが作曲者である可能性を最初に示唆したのは、イギリスの音楽学者、ウィリアム・バークレー・スクエアであった。彼は、この曲が1749年にロンドンで上演された、ナターレ・レスタ Natale Resta（生没年不詳）のオペラ、《３人の滑稽な伊達男たち I tre cicisbei ridicoli》の中で挿入歌として使われていたことを突き止め、これを上演した一座の音楽監督であったチャンピを作曲者の候補として挙げた（Barclay Squire 1899）。しかし、後に《３人の滑稽な伊達男たち》のロンドン上演の際の台本を検討したF. ウォーカーは、このオペラの主人公の名はモドゥリーナであって、ニーナと呼ばれる人物が全く登場しないということを最大の理由に、この曲が《３人の滑稽な伊達男たち》のために新たに作曲されたものではなく、既存のアリアに手を加えて挿入したものであると推測した。そして、その推測に基づいて、この曲の本来の作曲者がチャンピである可能性は薄いと結論付けている（Walker 1949b）。

以上のように、この曲の作者については、ペルゴレージ、チャンピ、いずれの説も決定的な決め手を欠いている。さらに、ウォーカーの推測が正しいとすれば、これまで全く候補に挙がっていない第三の人物が真の作曲者である可能性もある。従って、この曲に関しては、現状では「作者不詳」あるいは「伝ペルゴレージ」とでもしておくのが最も適切であろう。

《いとしい女よ　Caro mio ben》

このあまりに有名な曲の作者が判らないと言うと、驚く人も多いことだろう。但し、この曲の場合は作曲者の候補は、ほぼ二人に絞られている。[2] 一人は、従来から作曲者とされているジュゼッペ・ジョルダーニ Giuseppe Giordani（1743～1798）であり、もう一人はトンマーゾ・ジョルダーニ Tommaso Giordani（1730～1806）である。同時代に活躍したこの二人は、かつて、研究者たちの間

1　[*Bel nume che adoro.*] *Capolavori de' classici napoletani: strenna agli associati della Gasetta musicale* (*anno secondo, 1.° semestre*)*: sei melodie di Domenico Cimarosa, No.1* (Napoli: Stabilimento Musicale Partenopeo, n.d. [1852?])

2　E. ザネッティ（Zanetti 1991, 63）は、第３の候補として、トンマーゾの父ジュゼッペの名を挙げているが、これに関しては、従来から作曲者とされている人物と同姓同名ということ以外に、はっきりとした根拠が示されている訳ではない。こちらのジュゼッペ・ジョルダーニについては、歌手だったということは判っているが、生没年を含めて経歴に関する具体的な情報があまりにも少ない。従って、彼を第３の候補とする以前にまずその点について調査し、作曲者たり得る可能性があるか否かの検討をすることが先決問題であると思われる。それゆえ、現時点では、取り敢えず作曲者候補からは省いておく。

では兄弟と認識されており、しかも、先にロンドンに渡ったトンマーゾをジュゼッペが追いかけて行ったと信じられていた。そうしたことから、過去には、この二人の作品が混同される事態がしばしば起こった。しかし、実際には両者の間には血縁関係は無く、トンマーゾが長年に渡ってイギリスで活動していたのは確かだが、ジュゼッペはイタリアを出たことが無いというのが、現在の定説である。

《いとしい人よ》の場合、現時点で最古の資料と考えられるものは、ロンドンで1782年に出版されたと推定される印刷譜である。そこには肝心の作曲者の名が「ジョルダーニ氏 Sig.r Giordani」としか記されていなかったが、それでイギリス人たちには十分作曲者が特定できたとすれば、これがトンマーゾ・ジョルダーニを指していた可能性が高いとペイトンは主張し、自らの曲集にはトンマーゾ作として収録している（Paton 1981, 21-22; Paton 1991, 128）。しかしながら、他の研究者たちの意見は今なお慎重であり、最新の音楽事典でトンマーゾ・ジョルダーニの項目を見ても、この曲の作曲者は未だ決定できないとされている（MGG 1994-, Personenteil 7: 991; New Grove 2001, 9: 886）。

《私を燃え立たせるあの炎　Quella fiamma che m' accende》

この曲はベネデット・マルチェッロ Benedetto Marcello（1686～1739）作とされているが、これについては以前から疑念が表明されていた（Selfridge-Field 1990, 108）。そして、ペイトンは、フランチェスコ・コンティ Francesco Conti（1681～1732）が真の作者であるという、新たな説を発表した（ペイトン2001, 110）。しかしながら、この説の妥当性を判断するには、彼が曲集の解説に示した情報だけでは不十分であり、今後さらに慎重な調査と検討が必要であると思われる。従って、ここではこの曲を作者不詳の曲の中に入れ、そうした説があるということを記すにとどめる。

3）偽作である可能性が高いとされている作品

＊《教会のアリア　Aria di chiesa》

この曲はアレッサンドロ・ストラデッラ Alessandro Stradella（1644～1682）の作とされているが、すでに19世紀の後半には偽作ではないかとの声が挙がっており、現在、研究者たちの間では、これが偽作である事はもはや紛れも無い事実と認識されている。そして、その本当の作者は、ベルギーの音楽学者、フェティス Fraçois-Joseph Fétis（1784～1871）であろうというのが大方の見方である。こうした見解に至るまでには、以下のようなこの曲の歴史が背景としてあった。

そもそも、この曲はフェティスが1832年から1835年にかけてパリで行っていた「歴史的コンサート concerts historiques」の、第３回演奏会（1833年３月24日）において演奏されたことによって、世に知られるようになった。その時には、この曲はストラデッラが1667年に作曲した宗教的アリアと紹介されており、歌詞は「私のため息が Se i miei sospiri」という詩句で始まるものであったと考えられる。少なくても、最初の出版譜にはこの歌詞が付されていた。しかし、1842年頃に仏英の二カ国でこの曲が再度出版された際には、なぜか、歌詞は「主よあわれみたまえ Pietà Signore」に始まるものに取り替えられており、作曲年も1680年に改められていた。そして、その後1866年に、最初の歌詞である「私のため息が」は、アレッサンドロ・スカルラッティ Alessandro Scarlatti（1660～1725）のオ

ラトリオ《聖テオドージアの殉教 Il martirio di S. Teodosia》(1693) の中で、登場人物の一人によって歌われたアリアの歌詞であったことが、P. リシャード Paolino Richard によって明らかにされた。[3] そのことにより、この曲が偽作ではないかという疑いは一気に濃厚になったのである(Sala 1981, 90-100; Salvetti 1982; Murata 1999, 91-93)。[4]

《もし貴方が私を愛してくれて Se tu m'ami》

先に挙げた《ニーナ》と同様、ペルゴレージの作として知られているが、真の作者はパリゾッティではないかという疑いが持たれている作品。但し、《ニーナ》の場合と状況が異なるのは、この作品に関しては、パリゾッティが自分の曲集にこれを収録する以前の、この曲の楽譜が全く発見されていないということである。そして、そのこと自体が、この曲がパリゾッティによる偽作ではないかと疑われる最大の原因となっている。ただ、歌詞については、1727年にロンドンで出版された、パオロ・ロッリ Paolo Rolli (1687〜1765)の『カンツォーネとカンタータについての2巻 Di canzonette e di cantate libri due』の中に見出せるものであり、その点では、この曲がペルゴレージの作であったとしても年代的な矛盾は生じない (Walker 1949c, 305-306)。

4) その他の問題

《愛に満ちた処女よ Vergin tutto amor》

《踊れ、やさしい娘よ Danza, fanciulla gentile》

この2曲は、いずれもドゥランテ Francesco Durante (1684〜1775) の作品に基づいていることは間違いないのだが、原曲はソルフェージュ用の教材で、歌詞を持っていなかった。歌詞とピアノ伴奏は19世紀の作である。従って、厳密な意味で、これらの曲を「ドゥランテ作曲による歌曲」と称することができるかどうかという点に関しては疑問が残る。ちなみに、『ニューグローブ世界大音楽事典』第2版に掲載されたドゥランテの作品表においては、歌詞を付された編曲版については、特定の版を選び出してソルフェージュの項目の中に含めている。パリゾッティ版の場合を言うと、《踊れ、やさしい娘よ》はそこに含まれているが、《愛に満ちた処女よ》は除外されている。こうした区別は、おそらく、各曲における原曲からの改編の程度を基準として成されたものであると考えられる (New Grove 2001, 7: 744)。

＊《側にいることは Star vicino》

この作品は複数の問題を抱え、非常に複雑な状況のもとに成立している。まず、作曲者についてだが、この曲はサルヴァトーレ・ローザ作と言われて来たが、実は、ルイージ・マンチャ Luigi Mancia

3 《聖テオドージアの殉教》の初演は1685年である。リシャードは再演の際の台本を参照したものと思われる。しかし、いずれにしても、その初演がストラデッラの没後であることには変わりない。

4 この曲の歴史に関する情報は各資料間で若干の相違がある。例えば、この曲がフェティスのコンサートで演奏された際の歌詞について、サルヴェッティ (Salvetti 1982, 201) は「私のため息が」であったとし、ムラタ (Murata 1999, 91) は不明としている。しかし、これに関しては、現在ベルギーのロイヤル・アルバート1世図書館に残されている、フェティス自身の筆によるコンサート用の筆写譜 (Ms Fétis 7328 C Mus) が「私のため息が」の歌詞を持っていることからして、まずこの歌詞だったと考えて良さそうだ。また、19世紀当時の楽譜の出版年については、当該の楽譜自体に記されていないため、かつてのリシャードの推測に従うサーラやサルヴェッティと、楽譜の出版番号から新たに推測したムラタとの間で見解の相違があるが、ここではより説得力があると思われる後者に従うこととした。

(c.1665?～a.1708) のオペラ、《幼き王 Il re infante》(1696) の中のアリアであったことが近年になって明らかにされた (Murata 1999, 80)。作曲者誤認の原因は、《私はよく場所を変える》の場合と全く同じで、チャールズ・バーニーが入手した音楽帳の中にあったこのアリアを、『音楽史』の中でローザ作として紹介したことにある。また、曲の形式に関して言えば、オリジナルはダ・カーポ・アリアであったが、現在はそのA部分のみを２回繰り返す有節歌曲として広まっている。これについても、バーニーの譜例がA部分のみであったことが、その最大の原因であったと考えられる。従って、歌詞に関しては、第２節の歌詞は19世紀の詩人によって新たに創作され、付加されたものなのである (Walker 1949a, 204-205)。[5]

よって、この曲は、マンチャのアリアを編曲したというよりは、むしろ、その一部を素材をとして新たに作曲された、19世紀の歌曲と考える方が適当であると言えるだろう。

おわりに

これまでに述べて来たことから、わが国の声楽家たちにとって非常に馴染み深い「イタリア古典歌曲」が、いかに複雑、かつ多様な問題を抱えた楽曲の集合体であったかということが理解されたものと思う。それと同時に、演奏や教育の現場が、そうした情報に一切関心を払わず、あまりにも無批判なままに「イタリア古典歌曲」を利用し続けていたという、これまでの状況が了解されたのではないだろうか。確かに、「イタリア古典歌曲」は、それ自体、成立の過程においていかなる問題を孕んでいようとも、演奏用の作品として非常に完成度の高いものであり、教材としても大いに有効なものであることは間違いない。しかしながら、これまで「イタリア古典歌曲」を利用する者が、その完成度や有効性を絶対的に評価するあまり、これに関する他のいかなる情報に対しても無関心であったことは、結果として、「イタリア古典歌曲」の本質的な理解を放棄することにもつながっていたと言わざるを得ない。

今後、我々が「イタリア古典歌曲」について成すべきことは、まず第一に、各曲の出典を明らかにし、原曲の作曲者を確認することであろう。すでに作曲者の誤りが明らかとなっているものに関しては、出版関係の方々が早急に譜面上での表記を訂正して下さるように望みたい。そして、その次の段階として、我々は「イタリア古典歌曲」各曲について、原曲との間で詳細な比較研究を行う必要がある。これによって、両者の本質的な違いを認識することは、編曲版としての「イタリア古典歌曲」そのものに対する理解を深めることにもつながる筈だ。さらに、「イタリア古典歌曲」が成立した19世紀当時の周辺の状況に知識を広げて行くことによっても、その理解は一層深まることであろう。我々が今後も自信を持って「イタリア古典歌曲」を歌い続けて行こうとするならば、これらの研究はいずれも、必要にして欠くべからざるものであると言えるのではないだろうか。

5　ベイトン（ベイトン 2001, 62）によれば、第２節の歌詞は「ポローニャのペポリ伯爵によるもの」である。おそらく、これは、ベッリーニの《清教徒 I pritani》の台本を書いたことで知られる、カールロ・ペーポリ Carlo Pepoli (1796～1881) のことを指すものと思われる。また、現在、大英図書館に所蔵されている、《幼き王》の上演当時の台本 (Noris 1696, Atto I. Scena 7.) によれば、原曲の歌詞は以下のとおり。 Star vicino al bell' Idol che s'ama,/ E il più vago diletto d'Amor:/Altre gioie quest'alma non brama/ Più non chiede l'acceso mio core./ Star vicino &c.

引用文献対照表

Barblan 1973	Barblan, Guglielmo. "Un Cimador che divenne Cimarosa." *Quadrivium* vol.14: 197-206.
Barclay Squire 1899	Barclay Squire, William. "Tre giorni son che Nina." *The Musical Times* vol.15: 241-243.
MGG 1994-	*Die Musik in Geschichte und Gegenwart.* Zweite, neubearbeitete Ausgabe, hrsg. v. Ludwig Finscher.
Murata 1998	Murata, Margaret. " Four Airs for Orntea." *Recercare* vol.10: 249-262
Murata 1999	Murata, Margaret. "Dr. Burney Bought a Music Book・・・." *The Journal of Musicology* vol.17 no.1: 76-111.
New Grove, 2001	*The New Grove Dictionary of Music and Musicians.* Second edition, ed. by Stanley Sadie.
Noris 1696	Noris, Matteo. *Il re infante* (Roma: Giuseppe Vannacci).
Paton 1981	Paton, John Glenn. "Caro mio ben: Some Early Sources." *The Nats Bulletin* vol.38 no.2: 20-22.
Paton 1991	Paton, John Glenn, ed. *26 Italian Songs and Arias* (New York: Alfred).
Paton 1994	Paton, John Glenn, ed. *Italian Arias of the Baroque and Classical Eras* (New York: Alfred).
ペイトン 2001	ペイトン、ジョン・グレン編。『原曲に基づく新イタリア歌曲集』(*26 Italian Songs and Arias,* New York: Alfred, 1991) 芝泰志、枡本安紀子、秋山徹也訳、東京：音楽之友社。
Sala 1983	Sala, Emilio. "Fantasmi barocchi nel romanticismo francese." In *Barocchismi: Aspetti di reival nei periodi Classico e Romantico* (Milano: Ricordi), pp.71-142.
Salvetti 1982	Salvetti, Guido. "La verità di una falsificazione." *Chigiana* vol.39: 201-210.
Selfridge-Field, 1990	Selfridge-Field, Eleanor. *The Music of Benedetto and Alessandro Marcello: A Thematic Catalogue with Commentary on the Composers, Repertory, and Source* (Oxford: Clarendon Press).
Walker 1949a	Walker, Frank. "Salvator Rosa and Music." *Monthly Music Record* vol.79: 199-205.
Walker 1949b	Walker, Frank. "Tre giorni son che Nina: An Old Controversy Reopened." *The Musical Times* vol. 90 no.1282: 432-435.
Walker 1949c	Walker, Frank. "Two Centuries of Pergolesi Forgeries and Misattributions." *Music and Letters* vol.30 no.4: 297-320.
Zanetti 1991	Zanetti, Emilia. "Di alcuni interrogativi intorno a Caro mio ben." In *Musica senza aggettivi 1* (Firenze: Olschki), pp.61-83.